

令和5年度 自己評価表

鳥取県立鳥取西高等学校

教育目標	藩校「尚徳館」の「文武併進」の精神を受け継ぎ、高い志を持ち、幅広い教養を身につけ、社会の進歩・発展に貢献する創造性豊かな人間を育成する。	今年度の重点目標	『深い学び』『幅広い学び』を通じて新時代を創造するリーダーの育成を図る ① 学問の奥深さに触れ、深く学ぶことの喜びを実感できる授業を研究し、実践する。 ② 生徒が高い進路目標に挑戦しその目標を実現できるよう、戦略的に進路指導を進める。 ③ S S H事業やS G H関連事業を組織的に推進し、科学技術系人材やグローバル人材の育成を図る。 ④ 生徒の良識を培うと共に、挨拶を含め生徒の社会性を高める。 ⑤ 部活動に積極的に参加し上位大会を目指すと共に、その他スポーツ・文化芸術等各種大会・コンクール等へも積極的に挑戦する。
中長期目標	1 生徒が学問の意義に目覚め、深く学ぶことの喜びを実感できる質の高い教育を推進する。 2 生徒が確かな学力を身に付け、自己の将来像を描き、進路目標を実現できる教育を推進する。 3 生徒に良識を培い、自律と規範、自立と共生の精神を涵養することによって、社会のリーダーとなる素養を育てる。 4 教科の学習とともに、部活動や学校行事等の体験的活動への積極的参加を通じ、知徳体のバランスのとれた人間の育成を図る。		

評価基準 A:十分達成〔100%〕 B:概ね達成〔80%程度〕 C:変化の兆し〔60%程度〕 D:まだ不十分〔40%程度〕 E:目標・方策の見直し〔30%以下〕

年 度 当 初					評 価 結 果 (最終)		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
深く学ぶことの喜びを実感できる授業の研究・実践	○学問の奥深さに触れられるような授業実践 ○協同的・対話的な学習、I C Tの主体的な活用 ○SSH(スーパーサイエンスハイスクール)／SGH(スーパーグローバルハイスクール)事業の推進、課題研究の実践と改善	○生活評価アンケートで「授業や各種の行事により教養や関心の幅が広がった」生徒が89%、「自ら学ぶ意欲が高まっている」生徒が87% ○授業アンケートで「授業で学びが深まった」とする生徒が79% ○ICT を活用した協同的・対話的な学習の機会拡大に継続して取り組んでいる。 ○SSH等の研究・開発により課題研究が充実し、生徒の「主体的に探究する力」が高まってきたが、グローバルな視点に触れる機会が減少している。	○生活評価アンケートや授業アンケートにおける学校での学びの充実に肯定的な回答が8割超。 ○生徒が情報端末を授業などで有効に活用している。 ○ESD等の視点から、対話的・探究的な学びにより学問の奥深さに触れる課題研究が展開され、生徒の科学的な素養が高まり、グローバルな視野で物事を考えている生徒の割合が増加している。	○授業見学等を通した授業改善の推進。 ○課題研究メソッドやICT機器を活用した課題研究・探究学習の方法を習得。 ○SSH等の研究開発を通した、生徒の主体的な探究学習の深化。	○生活評価アンケートで「高校での学習の深まりとともに、自ら学ぶ意欲が高まっている」とする生徒の割合は87%である。 ○授業アンケートで「授業で学びが深まった」とする生徒の割合は80.6%である。 ○授業研究会等は実施できたが、普段の授業見学は未だ不十分である。 ○授業での ICT 活用は一般的になり、休校時の学習にも活用した。 ○課題研究では、研究到達度を測りつつ進行する取り組みを行うなど工夫を継続した。全校生徒への理数教育の推進を図り、研究スキルや研究倫理が高まっている。	B	○授業研究会の成果を生かし、教員同士が学び合い授業の魅力を高められるよう、日常的な改善となるようスケジュール化する。 ○引き続き ICT 活用方法を全教員間で共有し、全国の実践を活用するなど研究を進める。 ○生徒が深い学びに触れられるような教材開発をさらに進める。生徒に様々なプログラムや発表の場を提供して、主体的な学習活動を引き出す。 ○今後も課題研究の実施方法や指導内容を工夫し、研究開発を継続する。
進路目標の設定と、その実現に向けた確かな学力の育成	○面接・キャリア教育の充実 ○戦略的な進路指導の実施	○面接期間を軸に随時面接指導が行われ、キャリアパスポートの活用等、キャリア教育への取り組みが進んだ。 ○各種調査を通して、生徒の学習意欲の向上や進路意識の育成に努めている。また、「主体的に探究する力」の育成に努め、進路実現に結実させた生徒がいる。	○キャリアパスポートや各種調査・資料が十分活用され、多くの生徒が進路目標を定め、自律的に学習できている。 ○生徒や保護者に必要とされる進路決定のための情報が十分に提供され、これらを生かして生徒自身が「学び」を運用している。 ○大学合格者数が、国公立大学230名、難関10大学・医学科60名超。	○きめ細かい面接指導の継続と、各種調査・資料のより高い進路目標の維持・達成のための利活用。 ○進路決定や大学入試に向けた積極的な情報発信。特に変更点の多い2025年度入試の情報については重点的に情報を収集・提供。 ○生徒の粘り強く取り組む力や困難を乗り越えようとする力を育てるため、「Grit (やり抜く力)」に着目した視点をもつ。	○面接指導・個別指導に肯定的回答は87%であり、丁寧な面接指導が随時継続できしており、生徒の学習や生活についてのサポートが適切に行われている。 ○多様化する大学入試に対応した情報発信ができた。 ○大学入試制度改革に対応した指導の結果、総合型・学校推薦型選抜に多くの生徒が挑戦し合格を果たした。	B	○引き続き、きめ細かな面接指導を継続し、面接期間に会議等を入れない配慮も行う。進路指導方針を全職員が共有し、全校体制で取り組む。 ○分掌・学年・教科で連携し、生徒・保護者のニーズに合った情報発信を適切な時期に行う。 ○「Grit」に着目した視点からの評価・分析方法を手掛ける。
良識を培い、社会性を高めるための指導の推進	○自主・自律的な学校生活、自発的な挨拶の習慣 ○地域・社会との良好な関係を醸成 ○互いを思いやる心の涵養	○多くの生徒が規則を守り、落ち着いた学校生活を送っている。挨拶をする生徒は増えてきたが、自ら挨拶する生徒は多くない。 ○保護者の学校に対する関心・期待は高く、保護者と学校が連携して高い教育力を維持している。 ○日常生活の中で人権について考える生徒が多く見られるようになってきた。	○「規則やきまりを守り、けじめのある生活をしている」生徒の割合(アンケート)が90%以上。生徒同士や教員・来校者への挨拶が自然にできるようになっている。 ○生徒実態に即した学校の教育目標が保護者に伝わっており、連携協力が一層図られている。 ○生徒間で、自他の人権を尊重しながら人間関係を構築していこうとする態度が育まれている。	○規則の意味を理解させるとともに、あいさつ運動に取り組むなど、マナーを身につけた生活ができるよう、きめ細かな声掛けを行う。 ○生徒の様子や学校の教育目標などをより目に見える形で保護者へ伝える工夫を行う。 ○生徒の主体的取り組みに積極的に関わり、生徒の社会性を育み、人間関係作りをサポートする。	○「規則やきまりを守り、けじめのある生活をしている」生徒の割合(アンケート)は91.3%で、落ち着いた様子である。挨拶については自主的にできる生徒が増加している。 ○HP等を通じた生徒のスポーツ・文化芸術活動等の成果報告がなされている。 ○様々な場面において、個の尊重のあり方について考えようとする生徒の姿勢がうかがわれる。	B	○挨拶やマナー、ルールについて、生徒育成部・教育相談室・保健室や担任、学年団が連携を図りながら、継続的な指導をおこない、生徒の成長を多方面から促す。 ○課題研究や各授業において、人権や人権にかかわる社会問題を考える機会を積極的に設ける。 ○自転車ヘルメット着用等、交通ルールを守ることにについて取組を継続する。
部活動や体験的活動、対外的な大会や発表会等への積極的な挑戦	○部活動への積極的取り組み ○部活動以外の各種体育・文化・芸術活動等への参加 ○対外的な学術研究会、発表会等への参加の促進	○生徒が主体的に自身の生活のあり方を考えられるようになってきた。県大会ベスト4以上の運動部活動は12、中国大会以上の文化部活動は8と、成果も上がっている。 ○授業での活動を対外的な評価につなげている教科もあれば、部活の成果として好成績を収めている取り組みもある。 ○各種研究会・大会等参加生徒数は258人、国際大会・全国大会で功績をあげた生徒は36人。	○多くの生徒が学習と部活動を両立させている。 ○職員間の連携を密にしながら、生徒個々に対応した支援が行われている。 ○各種研究会・学会や大会等参加生徒数の規模を維持する。また、研究内容の質の向上や、社会や学術に貢献する研究が一定程度なされている。	○教員の専門性等を生かしつつ、活動計画等を活用した効率のよい部活動指導を研究する。 ○各種研究会・コンテスト等に関する情報を分かりやすく提示し、生徒が段階的に参加できる環境を整える。 ○生徒の活躍を積極的に広報するとともに、外部機関等との連携をはかりながら、生徒が積極的に「挑戦していく」ことへの支援を行う。	○学習と部活動を両立できている生徒の割合(アンケート)は87%である。 ○各種の研究発表会、コンテスト、研修プログラムの情報発信を充実させ、生徒の取組を奨励している。これにより、部活動の各競技や発表会等で活躍する生徒が増えてきている。 ○校内外のイベント等の情報発信や各種報道により、生徒の活動が高く評価されている。 ○150周年を機に、本校の多種多様な取組を、様々な媒体を通じて発信できた。	B	○部活動指導員等の積極的登用や他校との連携を強化する。また、部活動時間については、規程遵守を徹底する。 ○外部での研究発表を各方面から支援するとともに、その研究・研修成果を生徒へ還元することで生徒の積極性を高める。 ○生徒の活動について、校外への情報発信を継続的に行っていく。
業務改善の取組	○業務の効率化、簡素化 ○長時間勤務者の解消	○昨年度時間外業務時間45時間／月超の職員が月平均10.8人、360時間／年超の職員が26人。 ○部活動の時間外指導時間30時間／月超の職員が延べ39人。 ○学校行事等には見直しの余地がある。	○時間外業務時間45時間／月超の職員が月平均5人、360時間／年超の職員が10人。 ○部活動の時間外指導時間30時間／月超の職員が延べ10人。 ○学校行事等整理の具体案が提示できている。	○校内分掌に専担の係を設置。 ○教員自身がより勤務時間管理を行うことができるよう手立てを施す。 ○部活動計画表を確認し、計画の修正を依頼することで時間外指導時間の縮減を図る。 ○学校行事等の統合や精選。	○Google ClassroomやForms、「百問繚乱」を利用し、業務削減の努力を続けている。 ○月毎の時間外業務時間の個票配布や、退勤時刻の音楽など、一人一人の削減意識を高めようとしている。 ○時間外業務時間は昨年度に比べ月あたり平均1～2時間減少している。 ○1月末段階で、時間外業務時間45時間／月超の職員が月平均9.2人、360時間／年超の職員が15人。部活動の時間外指導時間30時間／月超の職員が延べ45人。	C	○行事の精選や全体の業務の縮減に努める。 ○職員への時間外業務時間の個票配布を継続し、さらなる時間外縮減の取り組みを進める。 ○部活動計画の点検・修正により、時間外指導時間の縮減を図る。 ○前例踏襲を排する職員個人の意識改革を進める。